

強迫傾向をもつ小学生男児への箱庭療法

木 場 清 子

(金沢大学医学部神経精神医学教室*)

はじめに

筆者らは、これまでに精神科児童外来で十数例の箱庭療法を行ってきた。通院の場合の児童患者はほとんどすべて神経症水準にあることと、児童の年齢上の制約から言語的精神療法が困難であることが主な理由である。箱庭療法については成書(Kalf, D.M., 1966, 河合隼雄, 1969)に詳しいので省略するが、参考のため簡単に述べると、患者が箱庭で作品を作ることによって自己を表現し、治療者がそれを受容的な態度で見守るという非言語的精神療法である。

最近、強迫傾向をもつ小学生男児に箱庭療法を行ない、改善がみられたので、作品と治療経過について報告する。この症例に箱庭療法を適用したのは、後に述べるように筆者が初めて会った時の元気のなさや話しかけに対する言葉の少なさから、身体を動かす遊戯療法より、ある程度決められた用具を使って何かを表現する非言語的精神療法が適していると考えたからである。治療目標は、本児のもつ強迫的行為の消失と、この年齢にふさわしい男の子に成長することである。(なお、本症例は筆者が心理学関係の全国研究集会で発表した際、コメンターの三木アヤ先生から多くの助言を頂いており、本報告はそれを参考にしながら、再検討する目的でまとめたものである。)

I. 症 例

症例 Ts. N. 7歳, 男子, 小学1年

〔家族歴〕 両親と3歳上の兄および母方の祖父母の6人暮らし。父は35歳, 男ばかりの7人兄弟の末弟で、婿養子として結婚した。母は31歳, 3人姉妹の2番目で家を継いでいる。父は国鉄に勤め、一昼夜勤務の翌日は休みになるので、兄や本児の相手をして遊ぶ機会が多い。母は娘時代から勤めている会社で着付けの仕事をしており、平日は午前8時頃出勤し、帰宅は早くて午後7時、遅い日は9時を過ぎることもある。また、日曜・祭日は特に忙しくて休めず、子どもたちと共に過ごす時間が非常に少ない状態である。兄は小学4年で、本児とは対照的に活発で外向的な少年である。友人も多く、学校から

帰ると鞆を放り出したまま遊びに行ってしまう、家に居る弟と一諸に遊ぶということはほとんどない。祖父は61歳, 元気で農業をやっている。祖母は58歳, やゝ神経質なところがあり、以前に不眠のため精神科で治療を受けたことがある。母が勤めているので、本児ら兄弟の養育と家事をすべて引き受けている。

〔生育歴〕 胎生期・出生時とも正常。生下時体重は2700グラムでやゝ小さかったが、始歩・発語とも標準であった。生後3カ月過ぎに原因不明の発熱のため1週間入院した。6カ月頃から喘息の発作が始まり、以来現在まで治療を続けている。生後1カ月過ぎから祖母に育てられ、日頃接触の少ない母になつかず、入浴も就寝も祖母と一緒にであった。小さい頃から大人しく、神経質で几帳面、真面目な性格で、自分のことは自分でするのはほとんど手のかからない子だったという。幼稚園時代に入園にこだわるようになり、スーパーマーケットなどの出口と入口が別になっている所でも、入った場所からでないと出ないという強迫的なところがあった(これは現在でも続いている)。

小学校入学後も、帰宅すると自分で洋服を着換えて宿題を済まさないで遊ばない、自室の机の上をきれいに片づけ、お菓子やガムの包み紙をきちんとたたんで机の引き出しにしまってあるという几帳面さがみられた。友人は少なく、自分から遊びに行くことはほとんどない。成績はトップクラスで、治療終了後(小学3年時)のWISCでも、VIQ114, PIQ128, FIQ124を示した。

〔現病歴〕 Fig.1 参照。昭和55年1月29日(1年3学期)、学級担任から「N君の様子がおかしい」と連絡があり、迎えに行くと「教室の電気を消して欲しい」「教材をまっすぐに直して欲しい」「窓の鍵をかけて欲しい」など、状況にそぐわないことを言っていた。連れて帰ったが、家では別に変った様子はみられなかった。翌日、某脳神経外科を受診したところ、異常はないと言われた。翌々日登校したが、「失禁した」と連絡があり、迎えに行った。この日は、家で玉のれんをなめて振動させ、それが止まるまでじっと見ていたり、部屋から出る時、戸を少し開けて外を覗き、いったん閉めてからもう一度開ける、トイレへ行くのにその前まで2、3回行っ

* 主任 山口成良教授

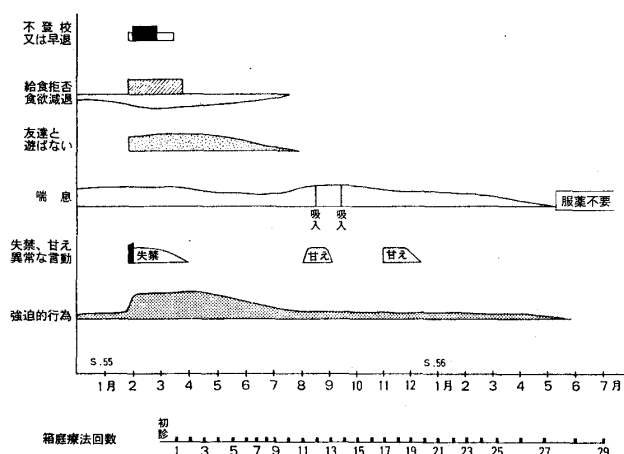


Fig. 1 症状および異常行動の変化

て戻ってきてから入る、といった異常行動がみられた。その次の日も、特に嫌がらずに登校したが、「手の力が脱けて鉛筆を持てないと言っているので、授業にならない」と言われて帰って来た。この日は、家で前日の異常行動に加えて失調性歩行がみられ、喘息の発作も連続して起こった。以後、「学校へ行きたくない」と訴え、約1カ月間休んだ。初めの10日間ほど母がつきっきりで看病し、その後、指圧へ連れていったりしたが、改善はみられなかった。家に居ても、これまで好きだったテレビ番組も見ないでうずくまるようにして座っており、母が呼んでも反応しないなど、かなり異常が目立っていた。

2月23日、金沢大学医学部附属病院小児科を受診した。Wilson病を疑われて検査を受けたが、異常なしという結果であった。その際、本児が小児科医に述べたところによると、「昨年10月の終り頃、給食の時間に友だちと馬とびをしていて先生に叱られた。友だちと2人で廊下に立たされ、とうとうその日は給食を食べられなかった。あの先生は嫌い。あの先生が居ると思うと学校へ行きたくない」ということであった。小児科医から、「強迫傾向のある登校拒否児」として、われわれの外来へ紹介されてきた。

Ⅱ. 治療経過

治療は、両親の面接と本児の箱庭療法を行なった。本児は30回の外来通院で30個*の箱庭を作ったが、以下にその中からいくつかの作品を例示して、経過を述べる。すなわち、30回のうち1～5回迄は全部、その後は作品の上で変化があったものを、終りの方は最終作品とその前回のものをとり上げた。箱庭療法場面で、治療者は少し離れた場所から見守り、本児が「終わった」と言ったり、その素振りをした時に、「これは何を作ったの?」と問いかけ、答えない時もそれ以上の質問はしなかった。

* 治療者のもとでは29回である

〔箱庭療法導入、初回面接 3月11日〕

本児と初めて会った。身体的発育は標準であるが、弱々しく元気のない様子である。話しかけても、「ウン」と言うか首を振る程度の応答しか得られない。人物画を描かせると、迷っていて仲々鉛筆を動かそうとせず、結局、面接室のハーフミラーに写った自分を見ながら男の子を描いた。そこで、箱庭療法を試みることにして、玩具棚や砂箱について説明する。少しは興味を示した様子なので、「今度からやってみる?」と言うと、「ウン」とうなずいた。

両親がそろって来院したので、父親を男性医師、母親を女性医師が面接することに決め(両医師とも、それぞれ子をもつ親である)、治療終結までこの分担を維持した。両親は、本児が学校へ行きたくないと述べた昨年10月のことは随分以前のことであるし、その後も嫌がらずに登校していたのだから、それが原因とは考えられないと否定的であった。むしろ、急におかしくなる3日前に、喘息の薬が変わったので、その副作用ではないかと思い問い合わせたが、主治医からそういうことはないと言われたという。また、学校でも家でも原因として思い当たることがない、ということであった。なお、本児は10日前から登校を始めたが、2限を過ぎる頃に元気がなくなり、給食を食べないで怠っているの、早退が続いている状態であった。

〔箱庭療法1回目(Fig. 2) 3月18日〕

本児は入室したまま、入口の近くで、左右の親指を交互に口に入れて立っている。治療者が小さな動物の玩具を手にして種類を問うと、恥ずかしそうに小声で名前を言う。「これを使って何か作って見ない?」と誘うと、「ボク、こんな好きでないもん」「じゃ、何が好き?」「ドラえもんの本とかレコード」と言うので、2人でドラえもんの話をひとしきりする。やがて、「ボク、これを作るけど、砂遊びしたことないもん」と言う(本児は箱庭療法を“砂遊び”—Kalfの言うSandspiel—としての確にとらえている!)。「全然ないの?」と問うと、「幼稚園でしたけど、忘れたもん」と答える(この子は砂遊びは幼稚園児のような小さな子どもがする遊びだと思っていること、そしてボクは幼児じゃない!と言っているのだ、と治療者が受けとめて見守っていると)、しばらく玩具棚を眺めていた本児が木を取り出して箱の中に木を並べ始めた。1本1本、倒れないように砂の中に根を埋めてしっかり押える。14本の木で林を作り、その中にキリンを先頭に左上方へ向う動物の群を置いた。動物は、キリンの親子、イノシシ、サイ、象の親子の順で入れていった。右上の木の陰に投げ縄をもった1人のカウボーイと手前に銃を構えている男性2人、それぞれが動物を

狙っている。これを約10分間で作った。

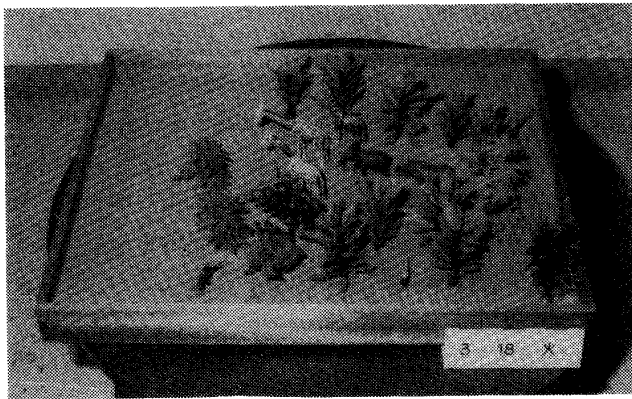


Fig. 2

「これは何を作ったの？」と問うと、「動物が逃げていくところ」と答える。「うまく逃げられる？」「サイがこれ（カウボーイ）につかまる。お母さん象とイノシシが撃たれる」と言う。

箱庭療法の第1回目の作品は、現在の内的世界を表すと共に、今後の展開を示唆するものとして特に重要な意味をもつと言われている。ここでは、動物がすべて左方向（無意識の世界）へ向っており、状況は動物が人間に狙われていて危機的である。本児は、無意識の世界へ逃げ込まねばならないほど身の危険を感じているのであろうか？人間に撃たれてしまうお母さん象は何を表しているのだろうか？現実の自分の母への攻撃か、あるいは母親を失う子どもの象に自分の淋しさを投影しているのだろうか？

一般的に、箱庭の一つの作品だけでは意味がよく分らなくても、その後の流れを追っていくつかの作品を振り返って見ると、その意味がとれる場合も多い。今後、どのように展開していくかによって、この作品の見方も変わってくるであろう。

両親の報告では、本児は元気に登校はしているが、給食を食べて来ない、教室の机の上を1限終るごとに片づけねばならない規則なのにそれを守らないので、2限が終る頃には机の上が物でいっぱいになってしまう、ということであった。父親の言葉として、妻の仕事が忙しすぎるので辞めるように言っているが、会社の方が承知してくれないらしい、母親としての自覚が足りなくて困る、と妻に対する不満が聞かれた。

〔箱庭療法2回目(Fig. 3) 4月1日〕

入室して20分間くらい、棚を眺めたり、部屋の中を見まわしたりして立っている。甘えたような表情で治療者を見るので、「どうしたの？」と問うと、「おなかが痛い」と言うが、余り痛そうにも見えない。「どういう風に痛いの？」「シクシクと」と答えるので、トイレへ連

れて行って待っていると、「治った」と戻って来て、箱庭にとりかかった。緑色の柵を6枚組み立てて大きな囲いを作り、その中に種類の異なる木を4本置いた。木の下に象を一度置いたが、思い直したようにキリン2頭と入れ替えた。もう一つ小さな囲いを作り、中に犬を入れたり、ライオンを入れたりして迷っていたが、結局白い馬を1頭入れて終った。

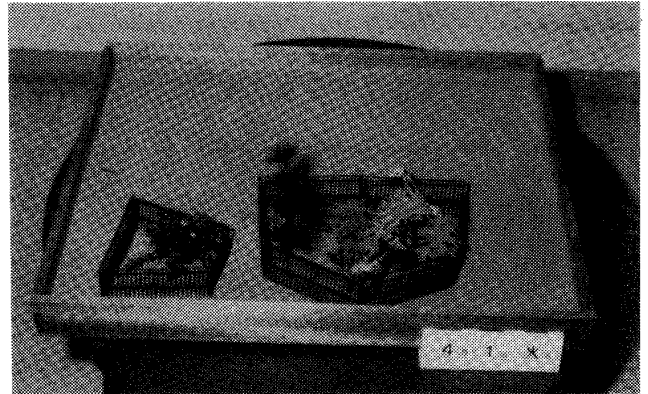


Fig. 3

作品は「動物園」と言う。後の作品にも何回か動物園のテーマが表れているが、この作品は其中最も動物の数が少なく、淋しい場面である。前回からの流れで見ると、無事に逃げおおせたキリンが柵の中という安全な場所を得て、休息していると考えることができる。しかし、箱庭の中の空間に比べて、何と狭くて窮屈な、閉じ込められたような安全さであろうか。

この頃、本児は春休みで家に居る。母親の報告によると、失禁はなくなったが、戸の開け方や出入口にこだわるのは続いていること、玄関に敷いてあるマットが少しでも歪んでいると気にして直すこと、動作が以前よりのろくなったと思う、ということであった。

〔箱庭療法3回目(Fig. 4) 4月15日〕

箱庭にとりかかるのが遅く、考えたり、迷ったり、箱の外にこぼれた砂を払ったりして逡巡している様子である。やがて、右から左へ木を植えて、手前と奥に広がりを持った並木のようなものを作った。その左側に星形のマークがついた戦車2台とジープ1台を右向きに置いて、相対するように右端に戦車を2台左向きに置いた。左側の戦車の後と左右を柵で囲み、前方は砂を盛り上げて土手を作る。向いの敵に見えないための「バリアー」と言う。「アメリカ（左）とフランス（右）の戦争」ということである。

3回目の作品で、戦いのテーマが表現された。しかし、後の作品に見られるような兵士の動きはなく、まだ戦いは始まっていない。左側の無意識的世界と右側の意識的世界の対決場面である。そして、無意識的世界は柵や土

手でがっちり防護され、外からの侵入に備えられている。戦いの前の静かな対決という感じで、戦闘準備完了というところであろうか。

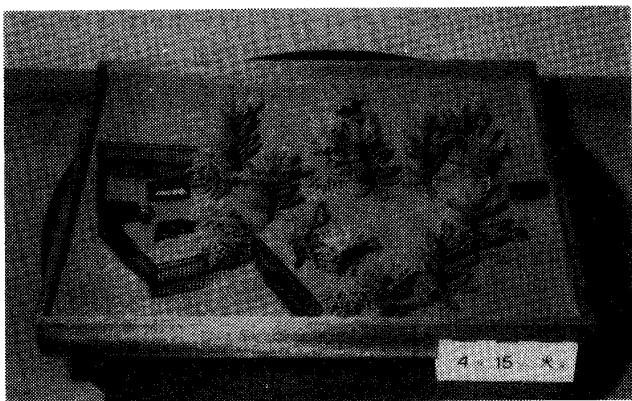


Fig. 4

本児は2年生になって、担任は変らなかったが、給食を食べるようになってきている。しかし、出入口にこだわることや物をよけて通れない（友だちが縄とびをしているところを突切っていくとか、廊下に配膳車が置いてあると誰かが動かしてくれるまで待っているということがあ）という行動がみられた。

〔箱庭療法4回目(Fig. 5) 4月28日〕

箱庭療法という場面に慣れてきた様子で、とりかかるのが早くなった。しかし、これまで10~20分間で作っていたのが、今回は完成するまでに50分間を要している。まず、中央に自動車を4台並べたが、すぐ取り去った。つづいて砂の上に指で道路を描いたが、それも消してしまい、中央に砂の山を作って、中にウルトラマンを2人埋め、その上に怪獣を1個乗せた。それから、少し離れた所に別のウルトラマンを3人砂の中に埋めて、それぞれの上に怪獣を1個ずつ乗せる。それらのウルトラマンを堀り出して別のウルトラマンに替えるという作業を延々と繰り返す。かなりの時間その遊びに熱中していて、見ていると果てしなく続くのではないかと思われるほど

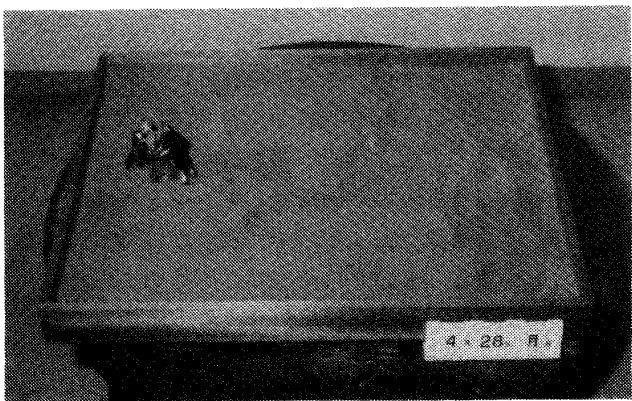


Fig. 5

であった。やがて、1個の怪獣を前後から2人のウルトラマンが取り組んでいるものを作って、「終り」と言った。本児の表情には、長い戦いが終わった、という感じがあった。「これ、どういうところ？」と問うと、「怪獣とウルトラマンが戦って、ウルトラマンが勝つところ」と答えた。砂の中には初めに埋めたウルトラマンが2人、そのまゝ残されている。

前回は戦いのテーマを表しながらも動きのない対決のシーンにとどまっていたものが、今回こういう形で引き継がれたことに、治療者はほっとした。すなわち、箱庭の上で、本児に戦う力が出てきたのは一つの成長であると考えられ、前回の対決場面から一步前進したと受け取られたからである。ここでくり返されている、埋めては堀り出すという行為は「死と再生」のテーマであり、また、大地からエネルギーを充填するという意味を持っている。埋めては堀り起こされていたのは原始的・本能的な力を表す怪獣ではなく、善の力を代表するウルトラマンであったことも意味が深い。本児はウルトラマンに自分を託し、大地からエネルギーを補給しながら原始的な力（怪獣）と戦って勝利を収めたのであり、彼の潜在的な力の強さを示している。

この頃の本児は、母の報告によれば、「全体的にかなりよくなった」ということであった。

〔箱庭療法5回目(Fig. 6) 5月13日〕

砂を盛り上げて丘を作り、平地に道路を描いて、箱の中を一周する自動車のレース場を作った。右下にレース用の自動車5台を置き、コースの途中で浅い川（水面は見えない）を堀って2つの橋を架けた。川には屋形船が一艘、丘の上に燈ろうと五重の塔が見える。レースは右下から左下へ向い、次は左上へ行ってさらに右上を回りスタート地点へ戻るという右回りのコースである。本児は「今、スタートするところ」と言う。

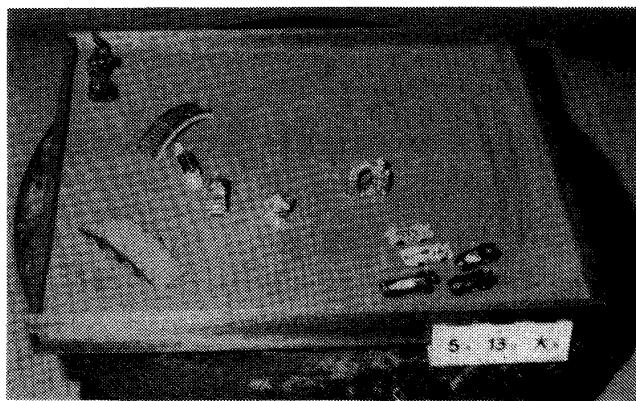


Fig. 6

前回、ウルトラマンを置く前に、初めにちょっと置いて止めた自動車が、今回は自動車レースという形で使わ

れた。一斉にスタートしようとする自動車は内的世界におけるエネルギーを感じさせるが、まだレースは始まっていない。活動開始のための準備完了というところであろうか。このコースは、意識的世界を出発点として無意識世界へ向い、再び意識的世界へ戻ってくるという、新しい力の萌芽がみられる。無意識世界に架けられている橋は、深い領域での問題を漠然と本児が感じていることを示すものであるが、この時点で治療者に橋の意味がよく分らなかった。

日常場面の本児は、玉のれんを気にしなくなった。家で勉強するようになった。しかし、出入口にこだわることに玄関マットを直す行為は続いている。学校では何も問題はないと言われた。以上の報告が母親からなされた。

〔箱庭療法 8 回目 (Fig. 7) 6 月 17 日〕

前回 (7 回目) 終了後に「今度、お母さんと一諸に箱庭を作ってみない？」と提案すると、「ウン、いいよ」と答えたので、今回は母と子の共同箱庭ということになった。治療者がこれを提案したのは、この母と子どもの日常のかかわりを見ることができであろうということと、内的世界を表現する箱庭を 2 人で作るという新しい経験がこの母子関係に治療的に働くのではないか、と思ったからである。母と子が並んで玩具棚を眺めて考えていたが、本児が立ったりしゃがんだりして迷っている様子を見て、母の方が先に「芝生を置こうか」と言って、右下に芝生を入れた。さらに、その横に白い垣根を置いてから、「Ts. ちゃん、家を置こうか」と声をかけた。

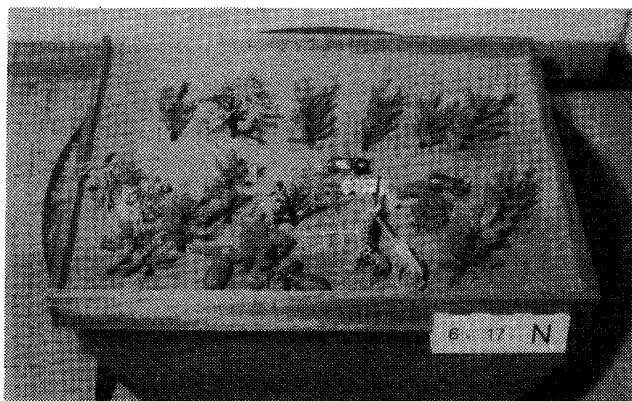


Fig. 7

本児は「まだ決まってないもん」と言いながら、動物の箱を引っぱり出して何かを探している。母が家を置いて燈ろうを入れようとした時、本児が決心したような表情で母の置いたものを全部取り去ってしまった。母は「あらー」と驚いた様子であったが、それ以上何も言わなかった。本児が木を 5 本置いたのを見て、母が「お宮さん入れようか」と言う。本児は「イヤ」と答えて、木を追加する。その傍に母が鳥居を置くと、本児が黙ってそれ

を取り去る。母は子どもの作った森のイメージに合わせて神社や鳥居を置こうとしたのであろうが、本児はそれを無視して自分の世界を主張しているようであった。この時点で、母は自分から箱庭の中に何かを表現することを諦めた様子で、子どもの置いた木が倒れないように根元に砂をかぶせるなど、製作を手伝う役に回った。

本児が林の中に自動車を数台置いたので、「こんなところクルマ通るの？」と母が聞く。「自動車レースやもん」と答える。「木ばかりやじー、どこ通るの？」と母。「まん中」と言って本児が木と木の間を浅く掘って道路を作る。道路は往復するように 2 本作り、手前の復路に白い網を敷いて砂をかぶせている。「何を作るの？」と母。「アフリカのレースや」と本児が答えると、「アフリカなら何か居るんじゃない？」と母がいう。「あ、動物！」と叫んで、本児は棚の中の動物を探す。「アフリカに牛なんか居ないし……」とひとり言を言っていたが、キリン 2 頭と象 3 頭を林の手前に並べて置き、道端の木の上にサルを 1 匹乗せて、本児は「終り」と言った。母が「どっちからスタートや」と聞くと、「こっちから」と本児が右を指した。

作品は、6 台の自動車が左方向へ向って走り、エネルギーは内的世界へ向いているが、レースのコースには逆方向への復路が用意されている。前に作られた (5 回目) レースでは、一斉にスタートの構えで動きのみられなかった自動車が、今回はレース中という形で受け継がれた。全体的な情景として見れば、1 回目の作品に似ている。しかし、その時は人間に狙われていた動物たちが、今回は安全な場所から人間の危険な行為である自動車レースを見物しているという、立場の逆転がみられる。復路に敷かれた白い網は、「雨が降ってもスリップしないように」とレースをする人間に対して安全への心くばりが示され、本児のやさしさが表れているのに、同席していた治療者は救われる思いであった。

母と子の 2 人が共に一つの箱庭を作るという場面では、それぞれが表現しようとする内的世界やイメージの違いがあるのは当然であり、それがどういう形でぶつかり、戦われ、最後にどのようにまとめられていくのか、ということがこの試みの治療的意義を左右するものである。最初に、母が「家」と「垣根」を置いて「守って上げますよ」という意味を表したのに対して、子どもは「それは違うんだよ」と取り去ってしまった。この時、2 人ははっきりと食い違っていた。そして、本児が決心したように自分の意思を通し、母に反対することができたのであるが、母はその時、特に干渉的でも支配的でもなかった。本児の主導権を認めた形で協力しながら参加し、最後に、「アフリカなら何か居るんじゃない？」と母自身

の希望を含めた、何か誘いかけるような発言をしている。本児はそれを「あ、動物！」と受け入れて、キリンと象とサルを置いて終ったが、その様子は自分も満足して母の意見を尊重したという感じであった。結果的に言えば、この共同箱庭の試みは治療上有意義であったと考えられる。

〔箱庭療法9回目(Fig. 8) 7月1日〕

病院内の廊下で治療者を見つけると、遠くからにこにこしながら本児が近づいて来た。「今日は1人で作る？」と話しかけると、「ウン」と答え、いかにも当然だという表情をする。

まず中央に木を1本植えて、その両側にキリン2頭を置いた。少し離れて、トラ、ライオン、象、サイ、白い馬をそれぞれ2～4頭ずつ群にして置く。ほとんど迷わないで、約10分間で作り上げた。本児は「アフリカでキリンが草を食べているところ。ライオンが象をにらんで、トラが白い馬をにらみつけている。サイは水を飲みに行くところ。でも、水はこっち」と言って箱の外を指した。

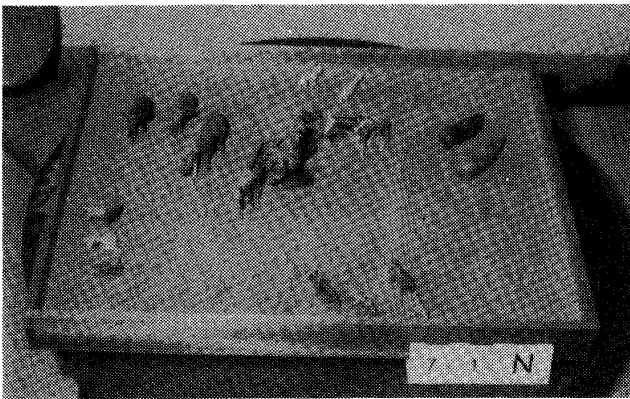


Fig. 8

前回と同様にアフリカが舞台であるが、動物だけの世界で、初めてライオンやトラといった猛獣が現れた。強い動物が弱い動物を遠くからにらんでいるという対決の世界で、中央のキリンだけが別世界にいるように悠々と草を食べている。本児は、野生の動物を使う場面では必ずキリンを用い(30回の箱庭の中で7回)ており、決まったように安全な場所に置いているのである。1回目の作品で先頭になって逃げていたのはキリンであったが、その時は「キリンは足の速い動物だから」と治療者は単純に受け取っていた。しかし、その後の使われ方を見ると、明らかに他の動物たちとは違っているように思われる。これは何を意味しているのであろうか？キリンは敏感で逃げ足が速く、首が長いので遠くまでよく見え、性格のやさしい動物だと言われている。このことは、治療者には本児の特徴とどこか似通っているように思われ、彼が好んでキリンを用いる理由なのかもしれないと思っ

た。

この頃、本児は毎日元気に登校しており、担任からも「全く問題はないし、元気になった」と言われている。家でも玄関のマットを直さなくなった。それを母が「遊ぶのに忙しくて、それどころではないのでしょうか」と笑うくらい、毎日遅くまで外で遊んで帰る。しかし、出入口へのこだわりだけはまだ残っていた。これは幼稚園時代からみられた行動であり、精神療法による症状の改善ということから言えば、「峠を越して麓が見えてきた」というところであろうか。今後の治療について相談の結果、両親は「まだ少し心配だからおまかせする」と言い、本児も「ここへ来る」と言うので、もう少し続けることになった。以後の経過は、箱庭の中で目立った変化のみられたものについて簡単に述べることにする。

〔箱庭療法10回目(Fig. 9) 7月15日〕

本児の言う「インディアンと西部の戦い」である。両者の中間に柵と木の葉を敷き、その上に砂をかぶせて「インディアン」の罠」と笑う。しかし、せっかくの工夫にもかかわらず、インディアンが負け、右側の西部群が勝つと言う。意識的世界の初めての勝利である。

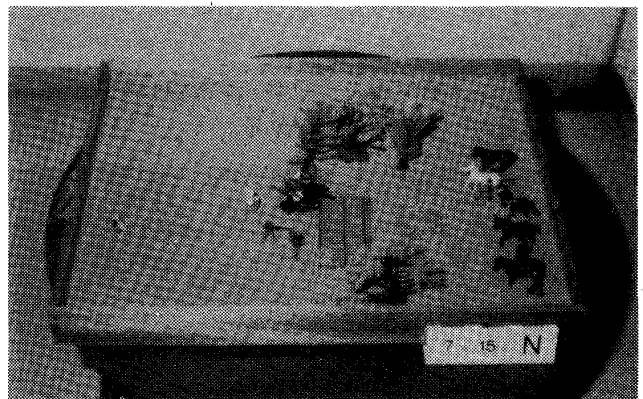


Fig. 9

本児が日常場面で実際に活動的になってきたことと、箱庭に表された意識的世界の勝利とが符合する。

〔箱庭療法12回目(Fig. 10) 8月5日〕

柵を作り、その中に恐竜が2頭入れられ、右側にヒコーキが2機置かれた。中央の砂の中に1機埋めて、その上に草を乗せてある。「ヒコーキが発進するところ」と言い、埋めたのは「古くなって要らなくなったヒコーキ」だと言う。

場面は原始時代の恐竜と最新ジェット機の対比である。恐竜を柵の中に閉じ込め、古いヒコーキを砂の中に埋めて、ジェット機が意識的世界から飛び立とうとしている。ヒコーキは新しい希望を表すものであり、未知の世界への出発を意味している。従来言われてきた出発又は旅立ちを表すものとして、「船出のテーマ」があるが、本児

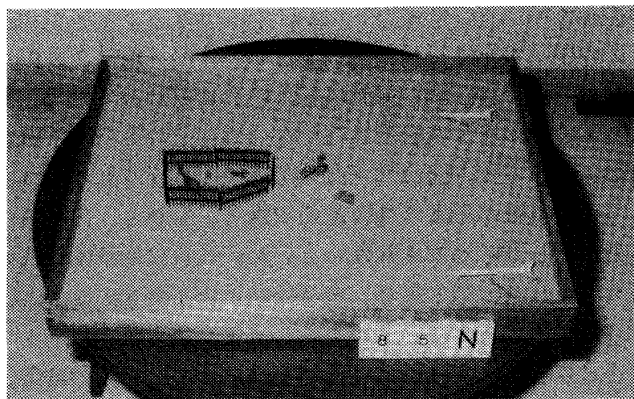


Fig. 10

の場合、「飛翔のテーマ」として表現されたと考えられ、治療者は“いよいよ出発するのか”と思ったのであるが、終結しようという気持ちには、何故かならなかったのである。

この頃、本児は父のひざに乗ったり、赤ん坊のように甘えたりすることがあると母親の報告があった。

〔箱庭療法16回目(Fig. 11) 10月14日〕

さまざまな種類の自動車を柵の中に納め、「これは見物するために置いてある」と言う。活動エネルギーの一時停止という感じであるが、左下にはブルドーザーがダンプカーと共に工事を始めている。本児の心の中で問題の整理が行われつつあると思われる。

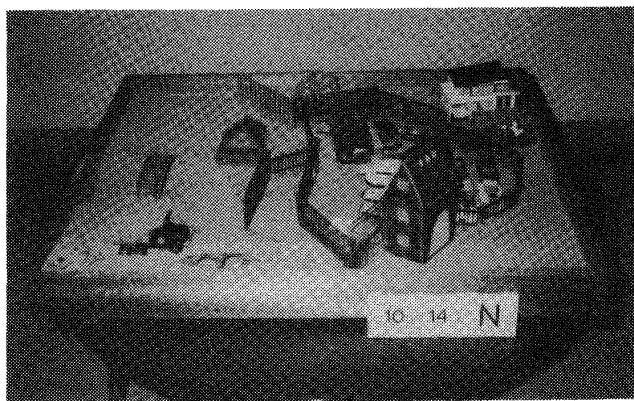


Fig. 11

〔箱庭療法17回目(Fig. 12) 10月28日〕

17回目にして、本児は初めて青い水面の見える川を掘り、橋を架けた。ガソリンスタンドも初めて使われた。この日、治療者は他の患者との面接が長びいたため15分ほど遅れて行ったところ、本児は別の医師と共に一つの作品を作り終えたところであった*。治療者が遅れたことを詫び、「今日はこれで帰る？もう一度作る？」と尋ねたところ、本児はためらわず「作る」と答えてできたのがこの箱庭である。直前に、別の医師のもとで作ったのは Fig. 13 で示した、木を12本置いただけの淋しい場面

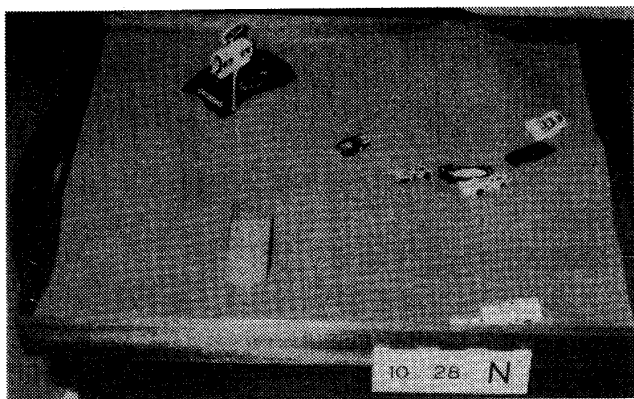


Fig. 12

である。おそらく、これは本児にとって、その医師と新たな人間関係をつくっていく第一歩として、これまでとは全く別の箱庭を作らざるを得なかったものと考えられる。治療者は、本児に不要な課題を与えてしまったことに気づき、申し訳ない気持ちでいっぱいであった。箱庭療法における患者—治療者関係、すなわち Kalf の言う「保護された状況（母と子の一体性）」の意味を、改めて教えられる思いであった。

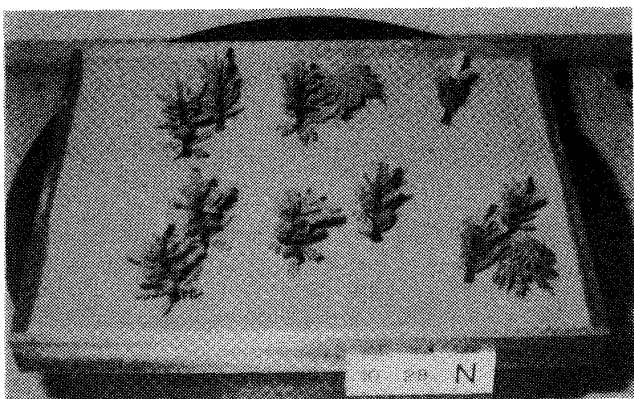


Fig. 13

作品は水という生命維持のための天然エネルギーとガソリンという文明生活に不可欠な化学エネルギーの両方が同時に現れている。1 台の自動車が給油中であること、問題解決の力を示す救急車が置かれていること、数台の自動車が右の意識的世界へ向って走っていることなど、本児の治癒力の強さが表れている。

〔箱庭療法20回目(Fig. 14) 12月9日〕

再び「動物園」である。2 回目の箱庭で作られた同じテーマに比べて、柵が広くなり、動物の数も増えていることが注目される。中でもキリンの数が最も多く、親子で木の葉を食べている。羊や象の親子など、大人しい種類の動物でまとめられ、穏やかで平和な家族の語らいが伝わってくるようである。

* 回数には含まなかった

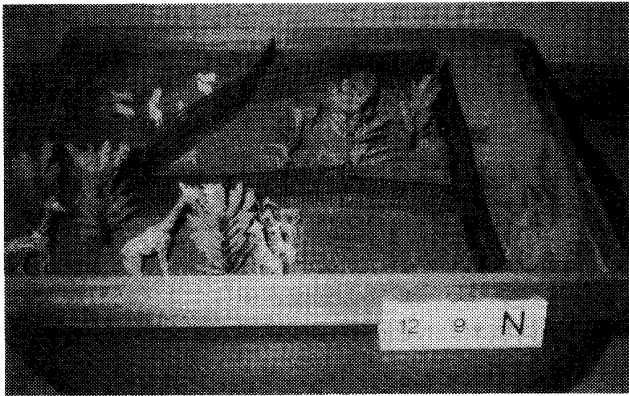


Fig. 14

〔箱庭療法26回目(Fig. 15) 4月7日〕

「インディアンと西部の戦い」と言う。この種の作品としては3回目であるが、前2回に比べて西部側の人数が増え、インディアンがかなり後方へ撤退している。左側の「インディアンが負ける」と本児は言いながらも、西部の人間が1人「インディアンに寝返っている」ことや酋長の傍に水が現れていることなど、無意識の世界でのエネルギーの補充もなされている。

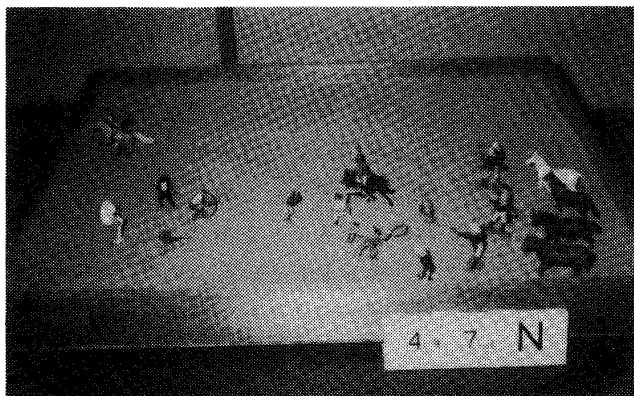


Fig. 15

この時点で、本児は3年生になった。母親の話によると、「大変元気になり、風邪もひかない。食べ物の好き嫌いもなくなって何でもよく食べている。内気だったのが消え、人前でも自分の意見を言えるようになった」ということであった。ここで治療者が「Ts.ちゃん、大分よくなったから、しばらく休んでみようか。それでも大丈夫だったら、もうここへ来るの終りにしてもいいのよ」と言うと、「ボク、どっちでも」と答えた。1カ月間休んで経過をみることにする。

〔箱庭療法28回目(Fig. 16) 6月2日〕

1つ前 (Fig. 15) の作品から約2カ月後である。この間に1度来院し、のんびりした感じの牧場風景を作ったが、今回は「昔と今」という「街のテーマ」である。川の向う側が「昔の街」で、手前が「今の街」だと言う。

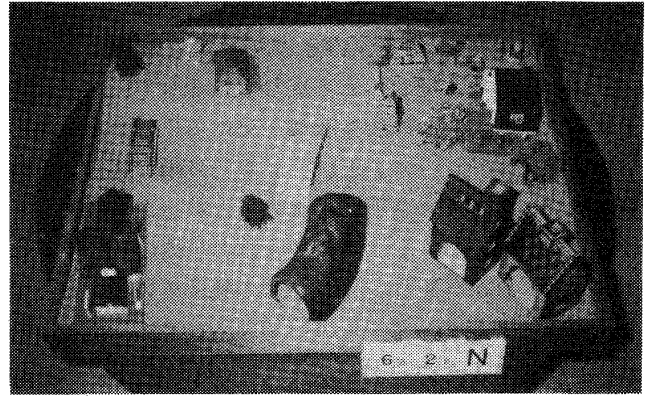


Fig. 16

上下を時間的流れをもった2つの世界に区切ることができたのは、本児の自我が強くなったことを示すものである。手前中央のトンネルの存在は、まだ未解決の問題が残されていることを暗示するが、トンネルの傍に2つの世界をつなぐ橋があって、見通しは明るいようである。本児はしばしば橋を使っているが(11回)、置く場所が一定せず、いろいろ架けてみて迷っているように思われる。呈示しなかった作品の中に、橋の両側を柵で保護しているものもあったり、2つの領域を結ぶことに意を用いながらも苦労している様子を感じられた。おそらく、問題は意識されながらも、この年齢の子には手の施しようのないものと感じられているのではないかと考えられる。それは、家族内の問題であるのか、この子の心身症的(小児喘息)症状の身体領域に関連する問題であるのか、治療者には十分理解できないまま残っている。いずれにしても、この時点で治療者が手助けすることはできなかったし、今後の本児の成長を待つことにした。

この頃、本児は暗くなるまで外で遊んでいる。友だちと近くの川で魚釣りをしたり、野球をしたりしていて、母が午後6時過ぎに帰宅しても帰っていない。夜はテレビや漫画に熱中していて、注意されないと宿題をしないで寝てしまう。部屋の中は病気になる前のように片づいておらず、乱雑になっていても余り気にしていない、と母親の報告であった。

〔箱庭療法29回目(Fig. 17) 6月30日〕

今回で終了すると約束してあったので、本児は作り終ると「終わったあ!」と叫び、非常に嬉しそうな表情をした。彼にとって、長い道程を歩き終えたという満足感があるいはもう病院へ来なくてもいい、すなわち病気が治ったのだという喜びであろうか? 治療者にはその両方が感じとられた。本児の小学1年の3学期から3年の6月まで、約1年4カ月間、箱庭療法という限られた場所ではあったが、共に過し、彼の内的世界とその成長を見守ってきた治療者にとっても、この日の喜びは彼と同じで

あった。心から彼に「ごくろうさま」と言った。初診時の弱々しかった、幼児っぽさの抜け切らない本児の姿と、目の前にいる呈しささえ感じられる少年になった姿とが対比されて、彼の成長に目を見はる思いであった。

作品は「カーレース」と言う。レース場に2台の自動車が衝突しており、右下にパトカーと救急車が待機しているところである。右上隅に作られた小高い丘の上にはヘリコプターが置かれ、「レースの様子を見守るために来ている」と言う。2つの橋が架けられている川の向う側へ、すでに1台の自動車が渡っている。左下には燈台が置いてある。

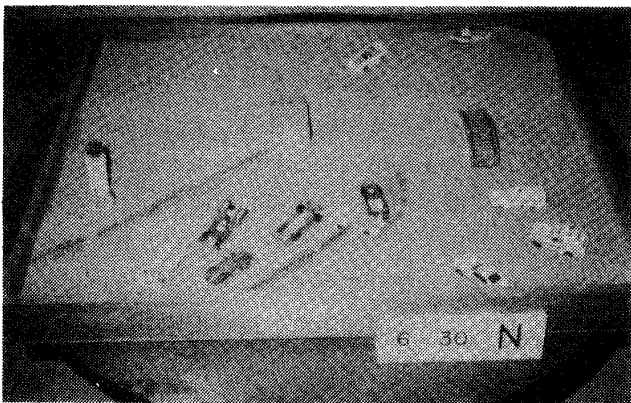


Fig. 17

箱庭療法の最終回の作品として見た場合、いわゆるマンダラではなく、自動車が衝突しているので、治療者は“この状態で終わっていいのだろうか？何かSOSを発しているのではないだろうか？”と不安になった。しかし、意識的世界には救急車とパトカーが万に備えて処理できる能力を現していること、右上のヘリコプターは全体を見通す理性が本児に備わっていることを意味する、と考えることができたので、約束通り終結した。このことについて浪花博は、最後の作品が完全にまとまっているものより、全体としての統合があれば、その中に少々のアシッドのある方が予後がいいと言う。

この頃には、本児の強迫的行為はすべて消失し、外で活発に友だちと遊ぶようになった。喘息発作も起こらなくなり、医師から薬の服用も必要ないと言われている。自ら希望して、スイミングクラブ、習字教室、そろばん塾、剣道クラブへ通っている。剣道のみは兄と一緒にだが、その他は1人でバスに乗って出かけているという。

以上、箱庭の作品をいくつか紹介し、それに治療者としての解釈を試みた。作品の中で見落したのものや、治療者の力量不足で読みとれなかったものもあった（事実、どうしても分らない作品を前にして戸惑ったこともあった）。また、ここに例示した箱庭について別の解釈も可能であろう。そうではあるが、治療者として本児と30回のセッ

ションを共有し、箱庭の製作過程を見守りながら本児の内的世界を共感しようと努めた記録である。1回目の時、箱庭の用具を前にして戸惑いを見せた本児とドラえもんの話をしなが、治療者は自分の息子と一緒に遊んでいるような気持ちになっていた（わが家にも丁度同じ年齢の男の子がいる）。三木アヤの指摘では、治療者が患者とどういうレベルでつき合うか、どういう役割をとるか、ということが患者—治療者関係の大切なことであり、それは治療技術以前の人間関係の問題であるという。本児に対して、治療者は極めて自然に母親の役割をとってしまったと思われるが、そのことについては考察で述べる。

Ⅲ. 考 察

この症例においては、箱庭療法の適用は正しかったと筆者らは考えている。すなわち、最初はかなり引っ込み思案でためらいがちであった本児が、4回目「ウルトラマンと怪獣の戦い」の場面で「死と再生」のテーマを表すことによって攻撃性を表出し、エネルギーを補給することができた頃から徐々に症状が改善していき、8回目の母と共同箱庭を作る際に、はっきり自分を主張した後は、急速に問題行動の改善をみている。

箱庭療法における治療者と患者の関係を「母と子の一体性」とするKalfの考えがいかに重要であるかは、17回目に治療者が遅刻して別の医師のもとで作られた作品に証明された。数本の木を置いただけの淋しい風景を作った本児は、もう一度作るかどうかを尋ねられた時、再び保護された状況で箱庭を作ることを選び、「水面の見える川」と「ガソリンスタンド」という、エネルギーの補給としての新しい力を産み出すテーマを表したのである。母親は仕事で忙しく、生後1カ月過ぎから祖母に育てられた本児は祖母になつき、心理的にも母親との結びつきが乏しかった。治療状況では治療者がごく自然に母親役割をとり、本児はその場面でも祖母とも実際の母親とも違う、安心した母子関係を見出すことができ、自我を成長させていったものと思われる。

両親の面接では、当初、子どもの問題が母親の忙しさから来ていると気づいた父親が、妻に仕事を辞めて子どもとの接触時間を作るように要求していた。しかし、現実には容易でないと分ると、できるだけ早く帰るという妻の言動を支持するようになっていった。母親は自分の両親と同居し、2人の子どもの世話と家事を祖母（実母）にまかせっきりで、娘時代の延長のような生活をしてきたが、面接を続ける中で、祖母に甘えていたこと、母親としての自覚が足りなかったことなどを自分の言葉として語るようになった。具体的には帰宅時間を早くする、できるだけ日曜・祭日は家に居て子どもたちと一緒に過

すという行動がみられた。彼女は性格的に未熟なところはあるが、偏りや固いところはなく、比較的素直な女性であった。

本児の治療に際して、両親とも協力的であり、本児が甘えた行動を表した時にうまく受け入れることができたことや家庭内の人間関係が複雑でなかったことなどが、効果的に働いたと考えられる。また、小学1年という年齢で箱庭療法を行なうと、作品は二の次になり、遊びが主体となることも多いが（それはそれで意味はある）、本児は知的水準が高く、箱庭を作ることで自己を表現することができた。このことが治療を成功させた第一の要因と言える。実際の作品を見通すと、「動物（園）」「戦い」「街」「カーレース」という4つのテーマがくり返されており、回を重ねるにしたがってそれぞれのテーマの中で、より広がりをもった内容的に豊かな作品へと変化していった。

乳児期から喘息の発作をもち、生来ひ弱だった子どもが、幼児期には出入口にこだわるようになり、小学1年の3学期に急性に強迫傾向を増強させたが、30回の外来通院で種々の強迫的行為を消失させ、以前にも増して元気になり、活発な少年へと成長していった。治療者は、29回の箱庭療法場面でひたすら本児の内的世界を共感することと、良き患者—治療者関係を維持することに努めたのであるが、実感としては、“本児はひとりで治っていった”という印象が強く、症状改善はこの子のもつ自己治癒力に負うところが大きい。

ま と め

強迫傾向をもつ小学1年の男子に、1年4カ月間で30回の箱庭療法を行ない、改善が認められたので報告した。8回目で母と子の共同箱庭を試みたこと、いくつかの作品を例示して治療者の解釈を付記したこと、患者—治療者関係について考察を加えたことならびに両親の面接から得られた情報を経過の中で記載した。

要旨は昭和56年12月7日、心理臨床家全国研究集会（大津市）で発表した。その際、コメントを快く引き受けて下さり、貴重なアドバイスを頂いた三木アヤ先生（東海銀行カウンセリングセンター）と司会の岡田康伸先生（天理大学）に深謝します。フロアから、有意義な助言を頂いた浪花博先生（仏教大学）にもお礼申し上げます。

この症例報告は、児童外来で両親の面接を担当された斉藤チカ子、年澄徹両医師の協力によるものである。また、本報告をまとめるに当たり、山口成良教授をはじめとして、金沢大学医学部神経精神医学教室児童精神医学研究グループの諸先生から助言を頂いた。併せて謝意を表します。

引用文献

- Kalf, D. M. 1966 Sandspiel: Seine therapeutische, Wirkung auf die Psyche. Rascher Verlag
（河合隼雄監修、大原貢 山中康裕共訳 1972 カ
ルフ箱庭療法 誠信書房）
河合隼雄編 1969 箱庭療法入門 誠信書房